



アゼルバイジャン語における疑間接語の生起位置と 疑問の焦点位置の相互関係について

著者	吉村 大樹, YOSHIMURA Taiki
雑誌名	トークス = Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 言語科学研究所篇
巻	22
ページ	75-85
発行年	2019-03-05
URL	http://doi.org/10.14946/00002104

アゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置と疑問の焦点位置の相互関係について*

吉村 大樹

アンカラ大学

taiki.wger1977[at]gmail.com

On the relationship between the position of the Azerbaijani interrogative clitic and the focus of question

Taiki YOSHIMURA

Ankara University

Abstract

トルコ語と同じくテュルク諸語南西語群に属するアゼルバイジャン語では、トルコ語と類似した形式である疑問接語 *ml* が存在する。いずれも諾否疑問文において生起し、生起位置によって話し手の聞き手に対する質問の焦点を変更するという機能がある点で共通しており、疑問接語の生起位置の分布は一見かなりの程度類似しているように見える。しかし、アゼルバイジャン語では言語話者によって文中に生起した場合の文の容認度に差がある。本稿ではまずこのことを指摘し、さらにトルコ語において韻律上のアクセントのみを特定の構成素におき、疑問接語が述語に近接して生起する例と疑問接語が特定の構成素にすぐ後接する例とで疑問文の意味が異なるのに対して、アゼルバイジャン語にはそのような違いが見られないという、疑問文の焦点表示の方法の差異についても明らかにする。

The Azerbaijani language uses the interrogative clitic *ml* to show that a sentence is a yes/no question and, in many cases, this clitic moves to the sentence-middle

*本研究は筆者が2015年-2017年度に助成を受けた科研費(若手研究(B):「アゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置と生起条件」、課題番号:15K16740、研究代表者:吉村大樹)の研究成果の一部である。また、本研究におけるアゼルバイジャン語の疑問接語の生起位置の範囲について、2017年2月に開催された第18回トルコ言語学国際会議においてYoshimura(2017)として口頭発表を行った。本稿は当該発表論文の内容に部分的な加筆・修正を加えたものである。なお、本稿で論じるアゼルバイジャン語の例文表記については、ラテン文字正書法に基づいた字母を使用する。各字母と音素との対応関係は、以下の通りである。a=/a/, b=/b/, c=/ç/, ç=/ç/, d=/d/, e=/e/, ə=/ə/, f=/f/, g=/g/, ğ=/ğ/, h=/h/, x=/x/, ı=/ı/, i=/i/, j=/j/, k=/k/, q=/q/, l=/l/, m=/m/, n=/n/, o=/o/, ö=/œ/, p=/p/, r=/r/, s=/s/, ş=/ʃ/, t=/t/, u=/u/, ü=/y/, v=/v/, y=/j/, z=/z/。

position to narrow the focus of the question. In this article, I will reveal that both Azerbaijani and Turkish interrogative clitics have similar properties: they occur in various syntax positions in the sentence, and harmonize with the preceding word in morpho-phonology. However, several speakers of Azerbaijani consider some types of sentences in which the interrogative clitic appears in the sentence-middle position to be less acceptable. My argument against this criticism is that there is a crucial difference between the grammatical behaviour of the Turkish interrogative sentences and those of Azerbaijani: In Turkish, there is a semantic difference between the cases in which the interrogative clitic appears at the end of the sentence but the accent falls in a specific word, and the case where the interrogative clitic occurs at the middle of the sentence to narrow the focus of the question. However, there is no such difference between different cases of the Azerbaijani yes/no interrogative sentence, in which the interrogative clitic is often avoided, particularly in colloquial usages.

キーワード: 形態論、統語論、テュルク諸語

Key Words: morphology, syntax, Turkic languages

1. はじめに

本稿では、トルコ語と同じくテュルク諸語¹南西語群に属するアゼルバイジャン語における諾否疑問文、特に諾否疑問文であることを表示する機能を有する疑問接語 *mI* の文法的振る舞い、より具体的には生起位置と焦点の関係について論じる。

テュルク諸語のうち、トルコ語では諾否疑問文のマーカーである *mI* が多くのテュルク諸語と異なる特徴として、文の述語に近接するだけでなく、文中にも生起して疑問の焦点を限定することがよく知られている。²

(1) (トルコ語)

- a. Sen dün İstanbul-a git-ti-n mi?
2 単 昨日 イスタンブル-与格 行く-過去-2 単 Q
「(君は) 昨日イスタンブルに行ったの？」
- b. Sen dün İstanbul-a mI git-ti-n?
2 単 昨日 イスタンブル-与格 Q 行く-過去-2 単
「(君は) 昨日イスタンブルに行ったの？」(焦点は下線部分)
- c. Sen dün mü İstanbul-a git-ti-n?
2 単 昨日 Q イスタンブル-与格 行く-過去-2 単
「(君は) 昨日イスタンブルに行ったの？」(焦点は下線部分)

¹本稿の議論の内容とは直接関係しないことであるが、「テュルク諸語」という表記の「テュルク」という部分について、日本における伝統的な言語研究の文脈では「チュルク」と表記することが慣習化されている。しかし原語である Türk (Turkic) の語頭音が *t* であること、またトルコ語における「チュルク」という発音の語感が好ましくないというトルコ語話者の指摘も考慮した上で、本稿では一貫して「テュルク」と表記することにする。

²以下、例文に関してアゼルバイジャン語でないもののみ表記することとし、それ以外は全てアゼルバイジャン語の例として表示する。

- d. Sen mi dün İstanbul-a git-ti-n?
 2 単 Q 昨日 イスタンブル-与格 行く-過去-2 単
 「君が昨日イスタンブルに行ったの？」(焦点は下線部分)

アゼルバイジャン語は、同じくテュルク諸語南西語群に属し、音韻・語彙・形態・統語等の観点から様々な点でトルコ語ときわめて近い関係にあるとされるが、上記いずれの領域でも(当然予測されることではあるが)トルコ語とは相違点が見られる。本稿では、諾否疑問文の構造がその一つであり、両者は一見類似しているものの生起位置による言語話者の容認度の差や意味構造などの点で違いがあると主張する。以下、具体的に両言語における諾否疑問文について見ていくことにしたい。

まず、アゼルバイジャン語の疑間接語 *mİ* は諾否疑問文にのみ生起しうが、諾否疑問文の成立には必ずしも必須の要素ではない。特に口語ではほとんど使われることがなく、疑間接語の生起の代わりに文末イントネーションを上げ、さらに最終音節の母音を相対的に長く発音することで標示する。下記(2b)では文末カッコ内の矢印は文末イントネーションが上昇調であることを表している。

- (2) a. Əli tələbə-dir-mi?
 Ali-Nom student-Cop-(Q)
 「アリは学生ですか」
 b. Əli tələbə-dir? (↗)
 Ali-Nom student-Cop
 「アリは学生ですか」

一方で、(3)のようなビザ申請書などの質問事項の例のように、(特に公的な)書記言語などでの表記には疑間接語が生起する例が多く見られ、後述するようにこの点においてアゼルバイジャン語としての文法性の判断の際にはやはり適格であるとする話者が多い。³

- (3) Ad-ınız və ya soyad-ınız dəyiş-ib-mi?
 名前-2 複 または 苗字-2 複 変わる-完了-Q
 「名前、または苗字が変更されたことがありますか」

疑間接語が顕現化した場合の形式、また接語として自らが後接する要素(つまり、疑間接語の直前の語)の最終母音の高低・円唇性、前舌性に従って母音調和するという音韻的特性という点では、トルコ語とアゼルバイジャン語の疑間接語はきわめて類似している。一方で、トルコ語でほとんどの場合義務的であるがアゼルバイジャン語では随意的な疑間接語の生起に関して、果たして疑問文が有する意味構造においても同じであると言えるかどうかという疑問が生じる。本稿ではこのことについて論じ、文中に疑間接語が生起する場合の意味の解釈に関して、結論として両者は同じとは言えないことを明らかにする。

³出典は実際のアゼルバイジャンビザ申請フォーム (http://tokyo.mfa.gov.az/files/file/Application_form.pdf; 2019年1月1日閲覧)で確認できる。

2. アゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置の範囲

本節ではアゼルバイジャン語の疑問接語の生起位置の範囲について明らかにし、またいくつかの疑問文におけるアゼルバイジャン語話者間の容認度の差異について確認しておきたい。まず、疑問文において疑問接語が文中に生起するという例が実際に存在することは Abudurrayev et al (1985, 2007) などの先行研究でも指摘されている。以下、(4) にその例を示す。(Abdurrayev et al. 1985, 2007: 88)

- (4) a. Bu kitab-ı Həsən-mi yaz-mış-dır?
この 本-対格 (人名) -Q 書く-間接過去-コピュラ
「この本をハサンが書いたのですか」「ハサンが」が焦点部分
- b. Sən şəhər-ə-mi ged-əcək-sən?
2 単 街-与格-Q 行く-未来-2 単
「(君は) 街に行く予定ですか」

また、(4) に示した述語の直前の位置 (いわゆる pre-verbal position) に生起した例だけでなく、それ以外の文中の位置に生起した例も見られる。以下 (5)、(6) ともに文献からの例を示す。

- (5) Doğrudan-mı quzu-lar kol-lar-ı ye-yir-lər?
本当に-Q 羊-複数 腕-複数-対格 食べる-現在-3 複
「本当に羊たちは (自分たちの) 腕を食べるの?」(Sent-Ekzüperi 2011:17)
- (6) O, yun köynək-mi al-maq istə-di?
彼 羊毛 シャツ-Q 買う-不定 望む-過去
「彼はウールのシャツを買いたかったの?」(Öztopçu 2012:225)

では、アゼルバイジャン語話者は実際に文中に疑問接語が生起した例をどのように判断するであろうか。以下、筆者の 2016 年 1 月にアゼルバイジャンの首都バクーにて、コンサルタントに聞き取り調査を行った結果を示すことにしたい。⁴まず、(7) で示すように単文などで疑問接語の位置を変更してみた場合は、ほとんどの話者が適格であると判断した。

- (7) a. O mən-ə məktub göndər-di-mi?
彼 1 単-与格 手紙 送る-過去-Q
「彼は私に手紙を送りましたか。」
- b. *O mən-ə məktub göndər-mi-di?
彼 1 単-与格 手紙 送る-Q-過去
(試みた読み: 「彼は私に手紙を送りましたか。」)

⁴この調査では調査当時バクー在住の、主に 10 代後半から 20 代前半の若年層を中心とした 16 名を対象に、あらかじめ用意した例文の容認性についてアンケート形式で判定してもらった。容認性については、適格である (1)、やや容認性が落ちる (2)、かなり容認性が落ちる (3)、容認できない (4)、という 4 段階のスケールに基づいて判断を仰いだ。本稿の例文ではやや容認性が落ちる例 (2)、かなり容認性が落ちる例 (3) をそれぞれ、?? で表し、容認不可能な例 (4) をアスタリスク (*) で表示している。なお、例文によっては記入ミスの変因により、有効回答と回答者の総数が一致しない場合がある。

- c. O mən-ə məktub-mu göndər-di?
 彼 1 単-与格 手紙-Q 送る-過去
 「彼は私に手紙を送りましたか。」(下線部が焦点部分)
- d. O mən-ə-mi məktub göndər-di?
 彼 1 単-与格-Q 手紙 送る-過去
 「彼は私に手紙を送りましたか。」(下線部が焦点部分)
- e. O-mu mən-ə məktub göndər-di?
 彼 Q 1 単-与格 手紙 送る-過去
 「彼が私に手紙を送りましたか。」(下線部が焦点部分)

一方、(8)で示すように、アゼルバイジャン語において複文の内部に疑問接語が生じた場合は容認度が下がると判断するコンサルタントが多くみられた。トルコ語では続く例(9)のように従属節内部に疑問接語が生じた場合でも適格であることから、両言語での生起位置の範囲に差がある可能性がある。⁵

- (8) a. Ata-m [xəstə ol-duğ-u-nu] biz-ə de-mə-di?
 父-1 単 病気 ある-分詞-3 単-対格 1 複 言う-否定-過去
 「父は、(彼自身が) 病気だということを私たちに言わなかったの？」
- b. ~~???Ata-m~~ [xəstə-mi ol-duğ-u-nu] biz-ə de-mə-di?
 父-1 単 気-Q ある-分詞-3 単-対格 1 複 言う-否定-過去
 (試みた読み: 「父は、(彼自身が) 病気だということを私たちに言わなかったの？」(下線部が焦点))

(9) (トルコ語)

- a. Ali [Esra'nın karşı ol-duğ-u]-nu düşün-üyor mu?
 (人名) (人名)-属格 反対の ある-分詞-3 単-対格 考える-現在 Q
 「アリはエスラが反対していると考えているの？」
- b. Ali [Esra'nın karşı mı ol-duğ-u]-nu düşün-üyor?
 (人名) (人名)-属格 反対の Q ある-分詞-3 単-対格 考える-現在
 「アリはエスラが反対していると考えているの？」(下線部が焦点)

なお、下記(10)の各例の対比で示されるように、述語後要素はトルコ語と同様にアゼルバイジャン語でもいわゆる情報構造上の背景化がおこるため、この位置に疑問接語が生起することは許容されない。⁶

- (10) a. Elnur mağaza-ya bu gün get-di?
 (人名) 店-与格 今日 行く-過去
 「エルヌルは店に今日行ったの？」
- b. Elnur bu gün-mü mağaza-ya get-di?
 (人名) 今日-Q 店-与格 行く-過去
 「エルヌルは今日店に行ったの？」

⁵(8b)では有効回答を行った16名のうち、適格とする話者が1名、やや容認度が落ちるとした話者が2名、かなり容認度が落ちるとした話者が7名、容認できないとする話者が6名という結果であった。

⁶例文(10c)の容認度については、有効回答16のうち容認可能としたのは1で、かなり容認度が低いという判断が2、残る13は容認不可とする結果を得た。

- c. *Elnur mağaza-ya get-di bu gün-mü?
 (人名) 店-与格 行く-過去 今日-Q
 試みた読み: 「エルヌルは店に行ったの、今日？」

また、(11) に示すように疑間接語がイディオム内部に生起する場合もやや容認度が下がると判断する回答者が多く見られた。⁷

- (11) a. Dost-un əl-dən get-di?
 友人-2 単 手-奪格 行く-過去
 「(君の) 友人は亡くなったの？」
 b. ?Dost-un əl-dən mi get-di?
 友人-2 単 手-奪格 Q 行く-過去
 試みた読み: 「(君の) 友人は亡くなったの？」

その他、分詞による従属節を諾否疑問文化した場合、(12b) に示すように疑間接語が従属節内部に生起した場合は適格であると判断するコンサルタントが多かった一方、(12c) のように分詞とその主要部名詞との間に疑間接語が生起した場合は不適格、あるいは著しく容認度が下がるとの判断を得た。アゼルバイジャン語の分詞に名詞を修飾する形容詞的な特性があると仮定すると、名詞句の内部に疑間接語が生起することができないという事実とも並行している。このように統語的な制約を受けることから、トルコ語と同じくアゼルバイジャン語でも疑間接語は統語的にみて、文中の他の語に対して独立性が高いということが言える。⁸

- (12) a. Bakı-ya ged-ən qatar-ı gözlə-yir-siniz?
 バクー-与格 行く-分詞 列車-対格 待つ-現在-2 複
 「バクーに行く列車を待っているのですか？」
 b. Bakı-ya-mı ged-ən qatar-ı gözlə-yir-siniz?
 バクー-与格-Q 行く-分詞 列車-対格 待つ-現在-2 複
 「バクーに行く列車を待っているのですか？」
 c. ??/* [Bakı-ya ged-ən mi] qatar-ı gözlə-yir-siniz?
 バクー-与格 行く-分詞-Q 列車-対格 待つ-現在-2 複
 「バクーに行く列車を待っているのですか？」

また、いわゆる存在文についても判断を依頼したところ、述語前位置に疑間接語が生起した(13b)と比較して、(13c)のような文頭の語に疑間接語が後接した場合、適格であ

⁷例文(11b)については、有効回答した16名のうち容認できると判断した回答はなく、やや容認度が落ちると判断した話者が10名、かなり容認度が落ちると判断した話者は4名、容認できないとした話者が2名という結果であった。

⁸トルコ語における疑間接語の生起位置と文法性との関係、またその理論的考察については Besler (2000), Yoshimura (2012), Özyıldız (2015) などを参照されたい。

例文(12c)では有効回答した16名の話者のうち、容認可能と回答した話者が1名、やや容認度が落ちると回答した話者が2名、かなり落ちると回答した話者が7名、容認できないと回答した話者が6名という結果であった。

るとする者がいた一方、容認度が下がると判断した話者も全体の半数以上を占めた。^{9 10}

- (13) a. Sinif-də tələbə-lər var?
 教室-位置格 学生-複数 いる
 「教室に学生たちはいますか？」
 b. ok? Sinif-də tələbə-lər-mi var?
 教室-位置格 学生-複数-Q いる
 「教室に学生たちがいるのですか？」(下線部が焦点)

これらのことから、以下のようにまとめたい。

まず、アゼルバイジャン語において疑問接語が文中に生じた場合、いくつかの例で適格性の判断にばらつきが見られるということが明らかになった。また、疑問接語が述語前位置以外に生じた場合でも適格であると判断する話者がいる。このことから、トルコ語においてやはり疑問接語が文中の任意の位置に生起できることを説明するために、焦点位置は限定的ではなく、述語の前位置であれば有効であるとする、「焦点の領域」(focus field) という概念を提唱した Göksel and Özsoy (2000) の議論がアゼルバイジャン語でも有効のように思われる。ただし、トルコ語とアゼルバイジャン語で焦点の領域の広さに程度差がある可能性があり、今後さらに精査する必要がある。最後に、前掲 (7b)(10c)(12c) などの容認不可能な例からも明らかのように、疑問接語は形態論的制約と統語的制約の両方にその生起位置を制限されており、両レベルでの制約に逸脱しない限りにおいて適格性が保証される。この点では Besler (2000) をはじめとする、トルコ語に関する多くの先行研究で指摘されているトルコ語の疑問接語の形式的ふるまいと同様であると言える。

3. 疑問文における焦点位置の表示の違いについて

前節でアゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置の範囲について述べたが、ここで問題になるのは、焦点位置の表示という意味的な機能もトルコ語とアゼルバイジャン語で同じと言えるかどうかということである。たとえば、以下 (14a) のように疑問接語が生起しない諸否疑問文に対して、(14b)(14c) のように疑問接語を述語末部分に生起させ、特定の語のみに韻律的フォーカスが与えられた場合、これまでみてきたような文中に疑問接語が生起する例と同様に、適格であるとする話者と容認度が下がると判断する話者とが存在する。¹¹

⁹例文 (13b) については、これまでの例文と同様に有効回答した 16 名の話者のうち、容認可能と判断した話者は 7 名、やや容認度が落ちると回答した話者が 6 名、かなり落ちると回答した話者は 2 名、容認不可と判断した話者が 1 名という結果であった

¹⁰脚注 9 と同様 例文 (13c) の有効回答は 16 で、容認可能と判断した話者が 6 名なのに対してやや容認度が落ちると判断した話者が 1 名、かなり落ちると判断した話者が 8 名、容認不可と判断した話者が 2 名という結果であった。

¹¹以下、例文中で大文字で表記されている箇所は、そこに韻律上のアクセントが付与されることを示す。なお、トルコ語、アゼルバイジャン語ともに小文字の *i*, *ı* に対応した大文字としてそれぞれ *I*, *I* として表記する。

例文 (14b) では、容認性についての表記を便宜上 OK/??/? という 3 段階を同時に表記している。アンケートの結果、有効回答 14 のうち容認可能が 7、やや容認度が落ちると回答が 3、かなり容認度が落ちると回答が 3、容認不可能という回答が 1 であったことを反映している。

例文 (14c) について、有効回答 15 のうち容認可能 7、やや容認不可 4、かなりの程度容認不可 3、容認不可 1 という結果であった。

- (14) a. Sən SƏHƏR YEMƏY-İ-Nİ ye-yir-sən?
2単 朝 食事-3単-対格 食べる-現在-2単-Q
「君は朝食をとっているの？」(下線部が焦点)
- b. ok/?/?Sən SƏHƏR YEMƏY-İ-Nİ ye-yir-sən-mi?
2単 朝 食事-3単-対格 食べる-現在-2単-Q
(試みた読み:「君は朝食をとっているの?」)(下線部が焦点)
- c. ok/?/?SƏN səhər yeməy-i-ni ye-yir-sən-mi?
2単 朝 食事-3単-対格 食べる-現在-2単-Q
(試みた読み:「君が朝食をとっているの?」)(下線部が焦点)

(14b)(14c)において、一部の話者において容認度が下がると判断される理由は、特定の語が焦点化されている、つまり話し手による質問の焦点が狭くなっているにもかかわらず疑問のマーカ―が述語末に存在しているためであると思われる。そうであるとする、少なくとも容認度が下がると判断するアゼルバイジャン語話者が有している言語構造について、トルコ語話者の有する言語構造とは相違点があると考えられる。以下(15)のトルコ語の例で示すように、(15a)が文全体を焦点とした質問であるのに対して、(15b)では話し手は、聞き手が朝食をとったのが昨日かどうかのみを質問の焦点としている。また(15c)では(15b)と異なり、話し手は「聞き手が他の日にハサンを映画館で見た」ことは前提として理解しており、さらに「(発話時点での)昨日、ハサンを映画館で見たかどうか」を質問している。ここで重要な点は、トルコ語においては特定の語(または構成素)にアクセントを置く手法が2種類あり、疑問接語の位置がどこであるかによって質問の意味が変わっているということである。たとえば(15b)では、話し手は聞き手に対して映画館でハサン(人名)を見たのが発話時から見て昨日であるかどうかを質問しているが、この時他の日に映画館でハサンを見たかどうかという意味は含まれないのに対して、(15c)の発話において話し手は、他の日に映画館で聞き手がハサンを見たことは想定しており、その上で昨日についてはどうであったかを質問している。¹²

(15) (トルコ語)

- a. Dün sinema-da Hasan-ı gör-dü-n mü?
昨日 映画館-位置格 (人名)-対格 見る-過去-2単 Q
「昨日、映画館でハサンを見た?」
- b. Dün mü sinema-da Hasan-ı gör-dü-n?
昨日 Q 映画館-位置格 (人名)-対格 見る-過去-2単
「(他の日ではなく)昨日、映画館でハサンを見た?」
- c. Sinema-da Hasan-ı DÜN gör-dü-n mü?
昨日 映画館-位置格 (人名)-対格 見る-過去-2単 Q
「昨日、映画館でハサンを見た?」(アクセントは dÜN「昨日」の部分)

¹²ただし、(15b)(15c)の意味の違い以外の重要な要素として、トルコ語でも語順(およびそれによって示される情報構造)の問題が存在するようである。あるトルコ語情報提供者(20代男性)の指摘では、(15c)のように疑問接語が近接しないで生起する場合、アクセントが与えられる語((15c)ではDÜN「昨日」の部分)はできる限り述語に近接したほうが自然であるという。これは(15b)で見られるように、疑問接語によって焦点化される要素が述語の直前の位置に限らないことは対照的である。

前掲 (14b)(14c) を容認性が下がると判断するアゼルバイジャン語話者がいることから、(15b)(15c) のようなトルコ語における意味の対比がアゼルバイジャン語にも見られるかどうかは疑わしい。実際、筆者が (14) の結果を受けて最近アゼルバイジャン語情報提供者 (20 代男性、バクー出身) に追加調査として聞き取りを行ったところ、当該情報提供者は疑問接語の文中での生起をすべて容認度が低いと判断した上で、質問の焦点を限定するためには疑問接語を生起させずに、特定の語だけにアクセントを置くと回答した。アゼルバイジャン語の疑問の焦点化の仕方がトルコ語との対照という観点でどうであるかという問題に最終的な解答を与えるには、文中での生起に対して容認度が高いと判断する情報提供者に対してもさらに追加調査を行う必要がある。しかし、少なくとも口語での文中への疑問接語の生起に対して容認度が低いと判断する話者に関しては、トルコ語で見られたような意味の違いを疑問接語の生起位置に反映させていないということは言えそうである。

なお、アゼルバイジャン語においてトルコ語の例 (15c) のような意味を表示するには、(16) のような話題を転換する談話標識などを用いていると考えられる。トルコ語でも、(15c) の例にさらに (17) のように談話標識を追加することが可能であるが、疑問文における意味の解釈という点ではアゼルバイジャン語の談話標識 ((16b) における *bəs*) のほうがトルコ語のそれと比較してより重要な役割を果たしていると言えるかもしれない。

また、別のアゼルバイジャン語情報提供者 (20 代女性) の指摘では、トルコ語と同様にアゼルバイジャン語でも焦点の限定化に関して語順上の生起位置が重要な要因となっている。当該話者によると、(16a)(16b) で示すようにアクセントが付与される語の生起位置は文頭よりも、より述語に近い位置のほうが適切であるという。Öztopçu (2012:300) では、諾否疑問文で焦点化される要素は述語のすぐ直前の位置に置かれると説明しているが、(16) の例はその説明と関連性があると考えられる。¹³

- (16) a. *Kinoteatr-da DÜNƏN Həsən-i gör-dü-n?*
 映画館-位置格 昨日 (人名) -対格 見る-過去-2 単
 「(君,) 昨日映画館でハサンを見た？」
- b. *Bəs kinoteatr-da DÜNƏN Həsən-i gör-dü-n?*
 では 映画館-位置格 昨日 (人名) -対格 見る-過去-2 単
 「じゃあ (君,) 昨日は映画館でハサンを見た？」(話し手は、聞き手が別の日に映画館でハサンを見たことは想定している)

¹³ただし Öztopçu (2012) の説明とは異なり、同アゼルバイジャン語情報提供者によると、下記 (i) のようにアクセントが付与される要素が述語の直前の位置にある例よりも、本文 (16a) のほうがより自然であるという。ここには情報構造とやらんで基本語順の問題などが関与していると思われるが、筆者は現段階ではこの発話の自然さが異なる理由について明確な解答を提示できない。これらの問題については聞き取り調査対象者の範囲を拡大することなども含め、今後の課題としたい。

(i) *Bəs Həsən-i kinoteatrdə DÜNƏN gör-dü-n?*
 では (人名) -対格 映画館-位置格 昨日 見る-過去-2 単
 (試みた読み: 「では、昨日はハサンを映画館で見た?」) (本文 (16) と同様の話し手の前提知識で)

(17) (トルコ語)

Peki, DÜN sinema-da Hasan-ı gör-dü-n mü?
 では 昨日 映画館-位置格 (人名) -対格 見る-過去-2 単-Q
 「では、昨日は映画館でハサンを見た？」¹⁴

4. おわりに

本稿ではアゼルバイジャン語の疑問接語の生起位置の範囲について、トルコ語ときわめて類似した生起位置の範囲が書記言語などで見られることを指摘し、また文法的にも適格であると判断する話者がいることを指摘した。ただし、文中に疑問接語が生起する例では話者ごとに判断が分かれる場合があり、文中に疑問接語が生起することに対して容認度が低いとする話者がいることを明らかにした。少なくとも容認度が低いと判断する話者にとっては、焦点化したい部分に韻律的フォーカスを与えることと語順が疑問の焦点を限定する手段となっているように見受けられる。この結果、疑問文の意味という観点から見た場合トルコ語とアゼルバイジャン語では疑問接語の顕現の有無、また生起位置による意味的焦点の限定の仕方が異なることから、表面的には両者は似ていても、それによる意味の表示は異なっている可能性があることを指摘した。

参考文献

- Abdullayev, Əlövsət (et al.) (1985, 2007). *Müasir Azərbaycan Dili :Sintaksis (Modern Azerbaijani: Syntax)*. Baku: Şərq-Qərb.
 Besler, Dilek (2000). *The Question Particle and Movement in Turkish*. Unpublished MA thesis, Boğaziçi University.
 Göksel, Aslı and Özsoy, Sumru (2000). Is there a focus position in Turkish? In Göksel, Aslı and Kerslake, Celia (eds.) *Studies on Turkish and Turkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, 219-228.
 Kamali, Beste (2011). *Topics at the PF Interface of Turkish*. Unpublished PhD thesis, Harvard University.
 Özyıldız, Deniz (2015). Move to mI, but only if you can. Paper read at the 11th Workshop on Altaic Formal Linguistics. <http://deniz.fr/pdfs/wafl-paper.pdf>
 Yoshimura, Taiki (2012). The position of the interrogative clitic in Turkish: A Word Grammar Account. In Kincses-Nagy, Éva and Biasci, Mónika (eds.) *The Szeged Conference: Pro-*

¹⁴この(17)の例について、脚注12と同様にトルコ語情報提供者(20代男性)から、この場合でも文としては適格であるが、実際の会話では前提部分があるために、固有名詞、および名詞は代名詞化されるほうがより自然な発話であるという指摘を得た。また本文(17)のような、名詞等をすべて具現化させたような発話では、たとえば実際の会話で当該言語話者が提示した脚注13の例文(i)と比較して、聞き手が知っているはずの情報も繰り返し述べていることになるため、話し手の怒りの感情が込められている(したがって、アクセントが与えられる部分はかなり強く発音される)ような印象があるという指摘があったことを付記しておきたい。

(i) Peki, dün?
 では 昨日
 「では、昨日は(ハサンを映画館で見た)?」

本稿ではこれ以上文脈に関連する問題には立ち入らないが、いずれにせよ本文(17)、上掲脚注13の例文(i)ともに、(15b)のような疑問接語が文中に生起する場合の諸否疑問文とは異なる解釈となるパターンであるということは指摘できる。なお、疑問接語の近接を伴わずに特定の語にアクセントが与えられるトルコ語の現象は、Göksel and Kerslake (2005), Kamali (2011) などでも指摘されている。

ceedings of the 15th International Conference on Turkish Linguistics. Szeged: Gold Press Nyomda Kft. 593-602.

Yoshimura, Taiki (2017). On the distribution of the Azerbaijani interrogative clitic. Paper read at the 18th International Conference on Turkish Linguistics. Adana: Çukurova University.

Yücel, Özge (2012). What moves where under Q movement? In Kincses-Nagy, Éva and Biasci, Mónika (eds.) *The Szeged Conference: Proceedings of the 15th International Conference on Turkish Linguistics*. Szeged: Gold Press Nyomda Kft. 603-616.

例文引用元：

Sent-Ekzüperi, Antuan (translated by Bağır, Cəfər) (2011) *Balaca Şahzadə (Le Petit Prince)*. Bakı: Qanun Nəşriyatı.

Öztopçu, Kurtulmuş (2012) *Elementary Azerbaijani* (2nd Edition). Istanbul: Mega Basım Yayın ve Ticaret A.Ş.

Author's web site: https://researchmap.jp/taiki_wger/?lang=japanese

(受付日: 2019年1月10日)